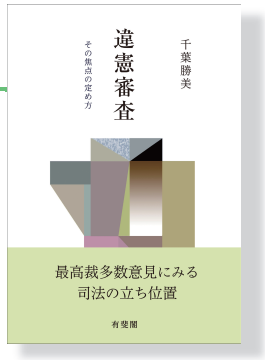
違憲審査――その焦点の定め方

千葉勝美

2017年5月発売予定／214頁／本体2500円＋税
四六判／上製



研究　実務　学部　LS　法曹

詳細を見る

編集担当者から

著者は，裁判官出身の最高裁判事として，2009年12月から2016年8月までの在任中，憲法判断にかかる数々の大法廷判決にたずさわりました。著者の補足意見は教科書等でもしばしば引用されています。本誌の読者のみなさんもきっと読まれたことがあるでしょう。

本書は，立法府と対峙する司法府の立ち位置について，著者が自身の補足意見を手がかりに考察するものです。反対意見は注目されることが多く，反対意見を記した裁判官が退官後に本を執筆することもまれではありません。しかし，多数意見の側からの発信は，これまでほとんどありませんでした。本書では，多数意見そのものが解説されることはありませんが，多数意見を形成した裁判官の個別意見を通じて多数意見が照射されます。最高裁の憲法判断は，どのような考慮の下に行われているのでしょうか。本書をひもといていただければ幸いです。（Z）

Index

Ⅰ　憲法の学習で必ず出会う近時の大法廷判決が考察の対象となります。

＊〔　〕は，主に対象となる判例

Ⅰ　衆議院議員定数訴訟の行方
――司法部と立法府とのキャッチボールが終わるとき
〔最大判平成27・11・25民集69巻7号2035頁〕
Ⅱ　猿払事件大法廷判決を乗り越えた先の世界
――二つの第二小法廷判決が語る司法部の立ち位置
〔最二小判平成24・12・7刑集66巻12号1337頁／同1722頁〕
Ⅲ　法令違憲の大法廷決定の遡及効を制限する法理
〔最大決平成25・9・4民集67巻6号1320頁〕
Ⅳ　今日における平等原則の意味と司法部の立ち位置
――二つの大法廷の判断が示す合憲性審査基準と国会の立法裁量
〔最大決平成25・9・4民集67巻6号1320頁／
最大判平成27・12・16民集69巻8号2427頁〕
Ⅴ　立法不作為と国家賠償請求の展開
〔最大判平成27・12・16民集69巻8号2427頁〕
Ⅵ　君が代訴訟における思想信条の自由と司法的判断の適合性
――内心の自由の規制と合憲性審査の判断枠組みについての試論
〔最二小判平成23・5・30民集65巻4号1780頁〕
Ⅶ　参議院議員定数訴訟大法廷判決と参議院の憲法上の位置付け
〔最大判平成26・11・26民集68巻9号1363頁〕
Ⅷ　欧米諸国の違憲審査のダイナミズム